

子育て支援実践報告

子育て支援についての一考察

—本学における子育て支援「母と子のふれあいあそび“ステラマリス”」実践報告—

河田 貴子

1. はじめに

今、大きな期待が寄せられている地域子育て支援。

近年のわが国における少子化の進行に対応するため、国を挙げて少子化対策が取り組まれている。その中で地域における子育て支援は施策の重点的課題とされている。

このようなとりくみが進められている背景には、家庭環境や社会環境の変化などにより子育てに不安や悩みをもつ保護者、育児経験に乏しい保護者が増えていることが挙げられる。そのような現状の中での子育て支援の広がりはこちら数年で著しいものがあり、地域を見回してみれば、保育所、幼稚園、児童館、地域子育て支援センター、保健所、NPO法人や民間のボランティアによる子育てひろば、育児中の親たちが自主的に運営している子育てサークルなど、さまざまな相談窓口や子育てひろばなどがある。本学では、平成20年度より学内における子育て支援事業の取り組みを始めた。

2. 子育て支援事業“ふれあい”

まず、本学の子育て支援事業「母と子のふれあいひろば」にはいる前に、筆者が本学に赴任する前の1年間、神戸市の「ふれあい育児相談室長」として勤務していたときかかわった子育て支援事業について少し述べてみたい。

神戸市では、子育て支援事業の先駆的な取り組みとして、平成3年に「ふれあい育児相談室」が設置された。平成12年度からは東灘区に移転し「地域子育て支援センター」として、それまでの育児相談業務のほかに区内保育所などと協力してさまざまな子育て支援事業に取り組むこととなった。

事業の目的は、子どもを取り巻く環境の変化や地域の人間関係の希薄化の中で、若い母親の多くは多少の差はあれ、育児に対して不安や悩みを抱えている。そこで、日頃の育児を支援することにより母親の育児の実践力を高めるようにすることである。

事業の内容は、育児相談（電話相談・面接相談・メール相談）、体験保育、育児セミナー、園庭開放補助などである。その中の育児相談業務では、電話相談は匿名性や即効性を生かしながら育児に関する相談に応じる。面接相談は子どもの様子を見ながら直接依頼者に接して相談に応じる。メール相談は時間的、地理的制約を受けないネットの活用により、より幅広く対応できるようにする。このように3つの方法を用いて育児相談に関わってきた。結果として1年間で698件もの相談件数があった。

年齢別相談件数としては、0歳児から3歳児までが多く、その中でも初めての出産、子育てに対する不安等から0歳児の相談が一番多かった。相談の内容もじつに様々である。発育・発達についての相談が1番多く、次いで生活習慣、育児の方法、生活環境などである。また、子育て情報に関する問い合わせが約1/3であるが、中でも育児サークル、イベントなどの問い合わせも多く、「家の中だけでなく外にも出て行きたい」「同じ仲間同士つながりたい」という母親の気持ちが強く伺えた。

相談者は、97%が専業主婦であった。その他就労者、祖母などである。専業主婦と働く母親とでは子育ての負担や悩みも異なる面が少なくない。専業主婦の母親の多くは、育児を一人で担う心身の負担感に苦しめられている。最も身近な存在であるはずの父親が育児に協力してくれないだけで

なく、子育ての悩みを理解してもらえないことが、いっそう母親たちを苦しめているのである。加えて社会から疎外されていることに寂しさを感じたりしている。働く母親は仕事と子育ての両立に悩みながらも、子どもが入所している保育所の保育士や、仕事の仲間に悩みの相談ができるのである。また、祖母からの相談は、自分の息子や嫁との育児方針の違いが殆どである。

相談時間は多くは30分以内であるが、中には延々と1時間以上電話口でしゃべられることもあり納得いくまで付き合うことと、電話を切るタイミングを思案することもあった。子どもの夜泣き、卒乳のタイミング、身体的発達の遅れ、言葉の遅れ、食事の問題、友達とかかわれない、兄弟げんか、赤ちゃん返りなど様々であるが、母親自身の相談として“引越してきたものの近所に友達もいなく遊びに行くところもなく家で子どもと向き合って生活していることにしんどくなる”“友だちができてでも家庭同士のつきあいのトラブルで悩む”“PTA役員や学校の母親同士のコミュニケーションによる悩み”などの相談も多くあった。地域的には、育児相談室がある東灘区の住民からの相談が断然多いが、神戸市全域ならず市・県外からの相談も結構あり、中には北は北海道から南は九州からと遠方からの相談もありびっくりする。些細なことでもどこかにすがりたい気持ちが電話の向こうから伝わってくる。遠方からの相談者には「なぜ神戸に」と聞くと携帯で検索したとの回答が返ってきた。今風若い母親気質かなと感じつつも、身近に相談者がいない現状を浮き彫りにした事例であるが、相談者の在住地域にも地域の子育て支援事業を行っているところが必ずあることを伝え、今後の育児の相談に乗ってもらえるようアドバイスすることもあった。解決の道筋はそれぞれ違うが、相談者の気持ちに寄り添い一緒に考えるなかで、だんだんと明るい声になり気持ちがほぐれていく様子が電話の向こうに感じ取れるとほっとしたものである。

育児相談室だけでは対応できない事柄については、児童相談所などの専門機関への紹介、あるいは病院での受診を勧めたり、保健所など地域のネットワークを活かし連携を取りながら見守るようにした。

また地域子育て支援センター事業には体験保育、育児セミナー、なかよし会、園庭開放などに多くの親子が参加している。体験保育では親子が定期的に継続して参加できる楽しい集いの場を設定して、子ども同士で遊んだり、親同士が交流する中で、親が子どもの発達を確認したり家庭で得にくい育児の情報を交換したりしながら育児の楽しさや方法を会得し、将来に向けて親同士の自主的な育児サークル育成のきっかけづくりを目指した。

育児セミナーでは、ファミリーひろばに父親の参加も推進し育児参加のきっかけになることを考慮しながら、家族みんなが関わって育児の情報交換等を行ったり、また、食のひろば“すくすくクッキング”では保育所の調理士お勧めのメニューで、クッキングを楽しみ「食」について共に考えることにした。保育所の園庭開放では、親子が触れあって遊んだり、親同士が井戸端会議的に育児の方法や情報交換をする場となっている。初めはやや緊張気味の母親たちも、回を重ねていくうちに保育所の門を入ると気に入りのおもちゃに駆け寄り子どもの様子を嬉しそうに眺めたり、母親もくつろいだ表情で、他の母親と言葉を交わすなど変化が見られるようになると、そこが居心地のいい場所になっているのだと感じる。砂場や木陰に腰をおろして子どものこと、家事のこと、主婦ならではの情報を交換しあう姿は、まさに今風井戸端会議である。月2回のなかよし会は、居住区に関係なく遠方から乗り物を利用しての参加もあり、また里帰り中の親子、祖母と孫など様々であるが、お互いのコミュニティの場になっている。最近では電話相談件数にも表れているように0歳児を持った母親の参加が増え、母親同士の子育て談義も盛んで、出産後早くからこのような触れあいを求められる母親が多いのだと感じる。悩みを持っている母親、楽しみ

に来ている母親、それぞれ目的は違っても和気あいあいと過ごすひと時に、子育て支援をするスタッフは其中でさりげなく悩みを引き出し、ちょっとしたアドバイスができればいいと思っている。参加者からの感想には、子育て支援の場に対する期待の大きさがひしひしと感じられた。スタッフは母親の一生懸命の子育てを力づけてやれるような“ほんの少しの手助け”ができればいい。お互いに学びあい、育ちあい、子どもがいて幸せと思えるような気持ちになれる。そんな「ひろば」づくりができればいいと常に考えている。

神戸市で一箇所だった「ふれあい育児相談室」子育て支援センターは、その後「神戸市地域子育て支援センター」と名称を変更し、現在では8区に設置され子育て支援に関する専門的支援をより身近で利用しやすいものとし、多様化している地域の保育需要に対応し子育て家庭に対する相談事業、子育て関連情報の提供、子育てサークル等への支援などますます充実したものとなってきている。

3. 本学における子育て支援

(1) 子育て支援事業「母と子のふれあいひろば」発足のきっかけ

本学では心理こども学科が開設して6年目を迎える。平成19年度入学より保育士資格が取得できるようになった。しかし、保育者を目指して入学してきたにもかかわらず、目的意識の低い学生が多く教育実習、保育実習以外に子どもと触れ合う機会も少ない。ボランティア活動等を率先して行っている学生もいるが、少数であり殆どの学生は保育現場や子育て支援の現状を把握したりすることができないのが現状である。

4年前の大学祭を控えていたある日、学生から「先生、せっかく心理こども学科という子ども関係の学科があるのに、何か子ども向けのイベントはできないでしょうか」との相談を受けた。今までの現場での子育て支援

の経験を活かせばいいだろうとの考えで、「あなたたちがやる気があるのなら手助けしよう」と応えた。しかし、ほんの一部の学生の思いだけでは事はなかなか進まなかったが、こんな声が出たことだけでも大きい。やれば何かできるだろうとの思いから、結局は筆者自身が先頭に立って学生集めから始めた。まず、何をするのか、だいたいの計画を立てた上で授業の際に学生に呼びかけ参加者を募った。4年生数名がすぐに名乗りをあげてくれた。このようにして始まったのが大学祭のときの「親子のひろば」である。このひろばは今年で4年目を迎える。平成19年度からは、「大学コンソーシアムひょうご神戸 地域交流委員会」の大学提携による子育て支援事業の一環として名称も「キッズオープンキャンパスー親子のひろばー」となり継続して取り組んでおり、年々学生の参加者も増え、地域の親子の参加者も増えにぎわっている。これがきっかけとなり、平成20年度心理こども学科の子育て支援事業として「母と子のふれあいひろば」が発足したのである。

(2) 母と子のふれあいひろば ―ステラマリス―

1) 事業の趣旨

地域に密着した子育て支援を目的とし、同じ年頃の子ども同士の遊び場や母親同士の交流の場を提供することにより、親子が楽しみながらひとときを過ごす中で、母親が子どもの発達を確認したり、育児の情報や方法を得る機会を与えることにより、母親の育児への不安を取り除いたり、育児の実践力を高められるような場とする。

また、改定・保育所保育指針第6章 保護者に対する支援の中で、地域の子育て支援が掲げられ、保育者の子育て支援の役割がこれまで以上に明確化されてきており、保育士養成機関での子育て支援に対する考え方や、実施の具体的方策をいかにすべきかが求められている。

本学において子育て支援事業を実施することで保育者を目ざしている学生が身近に子育て支援の場に参加し、子育ての様子を目で見て触れ合うことで積極的なかわりがもてるようになり、地域の子育て支援活動の目的を理解し、体験しながら学ぶ実践の場となるようにすることである。大学には心理学や保育関係の子育てに関する専門的な知識や技術も多く存在し、その知識や技術が役立つような子育て支援を目指し地域の子育て家庭に還元できることを目的とする。

2) 開催日時

平成 20 年 7 月から平成 21 年 1 月の間

原則として毎月 1 回 水曜日 10:00 から 12:00

回	開催日	回	開催日	回	開催日	回	開催日
第 1 回	7 月 9 日	第 3 回	9 月 10 日	第 5 回	11 月 12 日	第 7 回	1 月 21 日
第 2 回	8 月 6 日	第 4 回	10 月 8 日	第 6 回	12 月 10 日		

3) 内容

親子ふれあい遊び・手遊び・わらべうた・手づくりおもちゃ・絵本の読み聞かせ・紙芝居・パネルシアター・エプロンシアター・子育てミニ講話・子育て相談・クリスマス会・母親同士の交流・フリータイム・(おもちゃで遊ぶ) など

4) 対象者

地域の母と子 (0 歳～3 歳) 15 組

(母親 15 名 子ども 19 名 計 34 名)

5) 担当者

心理こども学科教員・学生 (2・3・4 年生有志)・事務局職員

6) 第1回母と子のふれあいひろば(1日の活動例)

実施日	7月9日(水)
時間	9時～12時
内容	<p>9:10 ひろば設定(おもちゃ・机・椅子・カーペット・おやすみマットなど) 看板設置・受付準備(名札・参加者名簿・出席カード・シール・筆記用具)・スタッフ名札着用</p> <p>9:45 受付開始 受付・出席確認(性別と読み仮名の確認・名札を渡す・ベビーカーの整理)・ 保育室に入室</p> <p>10:15 あいさつのうた 出席をとる 出席カードの説明と子の会の趣旨、これからの活動内容、諸事項などについて説明をする</p> <p>10:35 大型紙芝居「はらぺこあおむし」をみる</p> <p>11:00 お茶タイム</p> <p>11:10 おもちゃの設定をする フリータイム・お母さんの自己紹介・お母さん同士の交流 学生と子どもたちとおもちゃであそぶ</p> <p>11:45 おかたづけ</p> <p>12:00 さようならのうた</p>
参加教員	5名
参加学生	16名
感想	・第1回目で大学までの交通機関等の利用で所要時間が確認できず、遅れてきた人もいたが、全員出席できた

感想	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてのことなので、開催する側にも、参加者にも戸惑いはあったが、母親も子どもも結構落ち着いていた・出席カードは学生の手づくりで好評であった ・「はらぺこあおむし」は学生の声で進めたのはよかった。親子共に興味をもって見てくれていた ・遊びの場面では、うまくかかわれる学生は子どもの中に入ってよく遊べていたが、なかなか遊べない学生もいる ・母親のおしゃべりに耳を傾けている学生、どのように接していいのかわからない学生の姿もあったが、回を重ねることによりお互いに雰囲気慣れていけるのではないかと思う ・フリータイムでは母親同士楽しくおしゃべりしている姿が見られた
----	---

7) 保護者アンケートより（最終回参加者による）

①母と子のふれあいひろばは、何で知りましたか

区民広報紙「なだ」…10人 インターネット…0人

全員が区民広報誌「なだ」であった。

地域に開かれた大学を目指す意味もあり、灘区民を中心に募集する目的で区民広報誌「なだ」に載せた。各区の広報誌には子育て支援情報が掲載されていることを市民はよく知っている。大学のホームページにも掲載したのだが、インターネットを見ての募集はなかった。

②いままでにこのような関連の事業に参加されたことがありますか（どんな事業ですか）

保育所の園庭開放、区役所の子育てひろば、児童館のすこやかクラブなどいろいろな子育て支援情報をつかんで参加している。

③お子さんは何人ですか。

1人…6人 2人…3人 3人…1人

参加者は1人っ子が多い。初めての子育てに戸惑いもある。このような子育て支援の場でいろいろのことを学んで行きたいという思いが感じられる。

④ふれあいひろばの回数は

ちょうどよい…7人 少ない…3人

月に1回というのはちょうどよいと考える人、少ないと考える人それぞれである。ちょうどよいと答えた人は他のいろいろの子育て支援のイベントに参加。少ないと答えた人は、月2回ぐらいを望んでいる。また、月1回では次回までの間隔が長くその場に慣れにくいというのも理由の一つである。

⑤ふれあいひろばの時間帯は

開始時間と終了時間について聞いたが、殆どがちょうどよい。終了時間については幼稚園にお迎えの関係で遅いと解答された母親もいた。

⑥今回の内容でよかったものは

全体的に好評であったが、パネルシアターは年齢が小さかったため少し内容が難しかったかも知れない。

⑦お母さん同士の交流はできましたか

参加者全員が「交流ができた」との解答であったことは大きな収穫である。

⑧ふれあいひろばに参加する前と後では子育てに対する気持ちの変化はありましたか

- 絵本を読んでもらうときに最前列に陣取っていたこと。いつも引っ込み思案だと思っていましたのでびっくりしました。
- 余裕をもって接することができるようになりました。
- ミニ講話の間、泣いていると思った娘が元気に遊んでいるのに驚き嬉しかったです。
- 同年齢の子どもたちと触れ合えて、またいろいろな悩みを相談できて自分自身もよかった。子どもも人とのかかわりを勉強できたと思う。
- 他のお母さんたちといろいろお話しして、皆同じ悩みを持っていることが分かって安心できました。先生方のお話を聞かせていただいて子育てにゆとりができました。子どもも自分より大きな子に囲まれていい刺激になったと思います。
- 当初集団嫌いで泣いて「行きたくない」といっていましたが、秋以降毎回楽しみにするようになりました。ママと離れて遊べるようになりました。
- 余裕を持って子どもを見てやることができました。同世代または年下の子どもたちを間近で見ることによって「こんなことができない」など思わなくなりました。本当に楽しかったみたいで、子どもの喜ぶ顔が一番嬉しかったです。
- 二人を連れて子育てひろばに参加したのは初めてだったので新鮮でした。

子どもの発育・発達など気になっていたことが、同年齢の子どもたちと接してみて「こんなものだ」という安心感を持った母親、子どもの家庭での様子と違う一面を見て驚いたり、何よりもそれぞれに皆同じ悩みを持ちながら子育てしていることが分かって、悩んでいるのは自分だけではないことの確認が持てて、子育てにゆとりを持てるようになったことなど、母親の子育てに対する気持の変化が見られる。

⑨参加されての感想は（学生とのかかわりなども）

- 家には無いおもちゃや学生の方々に一生懸命遊んでいただいて嬉しかったです。
- 先生や学生のみなさんとお話したり接することで、娘の家では見られない顔を見ることができました。
- 本当に楽しい時間を過ごせました。気になったのは自由遊びが多かったのもう少しイベント的なことをしていただけるともっと楽しかったと思います。学生さんは勉強の一環なのでもっと積極的に前に出たほうがよいと思います。
- 学生のお姉さんと遊んでもらって子どもも喜んでいました。引き続き参加させていただきたいくらいです。
- とても楽しみにしていました。手づくりのおもちゃ、ミニ講座、紙芝居は特に印象に残っています。子どもも参加させていただいたおかげで社交的になり、随分成長しました。
- 毎回とても楽しく参加させていただきました。ここまでよくしていただけて本当に娘の心に残ったと思います。いつもこの学校の前を通る

- とき兄たちにも話しています。学生さんや先生には心から感謝しております。他の会と違うところは先生から直接お話を聞いたことです。
- 学生さんと仲良くなれて子どもも楽しそうでした。貴重な場に参加できてよかったです。子育てミニ講座もよかったです。
 - あっという間の半年でしたが親子で楽しませていただきました。娘も大きいお友達・先生方・お姉さんに遊んでもらって大喜びでした。
 - 7か月の間、子どもの成長と共に楽しい場に参加できてとても良かったです。
 - 毎月何をするのかドキドキ、楽しみながら通わせて頂きました。家で“うさぎさんの体操”親子でやっています。
 - 毎回楽しいイベントを沢山企画していただきありがとうございます。とても良い思い出になりました。
 - とても楽しかったです。親子共々1か月の1日をとても楽しみにしていました。私は子育てミニ講話でのディスカッションがとてもよかったです。先生方や生徒さん方に貴重な体験をさせて頂き親子共々充実した時間を過ごすことができ感謝しています。

学生の行動を見ると、最初はどのようにかかわっていいのかわからずに部屋の片隅から傍観している姿が目立った。学生の参加については第1回目の始まりのときに学生の体験の場として参加することを理解してもらい、学生の行動やかかわりなど気づかれた点については率直に指摘して欲しいとお願いしておいたのだが、アンケートにも表われているように不慣れな学生たちを暖かく見守り育てていただいたことを感じることができた。母親が学生と話してくれることで、学生自身が将来保育者となる自信につな

がっていく。しかし、母親からの指摘もあるように学生の積極的なかわりについては、今後の課題としていきたい。

⑩学生のコメント

○学生と母親とのかかわりから

- ・ 普段お母さんと話す機会がないため、このひろばで育児のお話や大変さを直接聞くことができ、貴重な体験ができた。
- ・ こんな機会は初めてだったので、何をしたらよいか分からなかったけど、お母さんに話しかけてもらって楽しく過ごすことができた。
- ・ 子どもたちの成長を感じる一方で、お母さんの大変さも強く感じた。周りの大人による、お母さんや子どもへのフォローが必要だと改めて思った。

○学生と子どものかかわりから

- ・ 1か月が経ち、もう忘れていてお喋りしたり笑ったりしてくれないかなと思っていたけど、話しかけたら応えてくれた。小さなことだけどすごく嬉しかった。距離が縮まった気がした。
- ・ 1か月前はお母さんにべったりで「一緒に遊ぼう」と誘っても全然なついてくれなかったけど、今日は最初から一緒に遊んだ。1か月だけど、とても成長していると感じた。
- ・ 親からなかなか離れられなくて恥ずかしがったりする子どもが多かったけれど、時間をかけて接することで、子どもは自然と

こちらを向いてくれる。言葉かけで振り向いてくれなくても、触れ合うことで喜んで笑うようになってくれた。

- ・子どもとどのように関わればよいのか分からず、後ろから様子を見ているだけだったけれど、途中からおもちゃなどを通して一緒に遊ぶことができとても楽しかった。
- ・子どもの遊ぶ様子を見てとても勉強になった。
- ・もっと上手に言葉かけができたらよかったのと思った。

8) 学生の感想

①母と子のふれあいひろばに参加して

母と子のふれあいひろばに参加して、子どもとのかかわりの中でいろいろなことを学んだ。普段の授業では学べないようなパネルシアターや絵本の読み聞かせ、手遊びなど子どもたちの前で実践することができた。クリスマスパーティでは、サンタクロースが登場する所で、殆どの子どもがサンタクロースを見たことがなかったので、嬉しくて握手を求めに行く子どもや戸惑って泣き出す子どもなどいろいろな表情を見ることができた。プレゼントの袋は手づくりで子どもたちの人数分の袋やプレゼントを用意するなど準備はたいへんだったけれども、子どもたちの笑顔をたくさん見ることができ、とても嬉しく思った。

母と子のふれあいひろばでは、幼稚園ボランティアや保育園アルバイトのような直接子どもとかかわるボランティアと違って、子どもたちに喜んでもらえるよう準備をしたり練習をしたりするなど保育の裏側を学ぶことができた。

そして、子どもたちが日々成長していることを実感した。初めはとてもおとなしく母親から離れなかった子どもが、母親の元から離れて遊ぶこと

ができよくお話もしてくれる。おもちゃの片付けを促さなくても自分から率先して片付けるようになった子どももいる。

初めはあまり歩けなかった子どもが、今では何歩も歩き、いくら倒れても立ち上がり歩こうとする姿にとても感動した。そして私が一番驚いたことは、子どもたちの集中力の変化である。母と子のふれあいひろばの雰囲気徐徐に変わっていることに気がついた。最初は慣れない環境のせいかよく赤ちゃんが泣き出したり、絵本を読むときなどなかなか集まって来ずに後ろで見ている子や全然絵本に興味を示さない子がいたりした。しかし最後には、子どもたちみんな前に集まりおとなしく集中して絵本を見ることができた。これも子どもたちが成長していると実感した瞬間である。

子どもたちと接してみて、子どもの成長や感情の変化など初めてわかったことがたくさんあった。母と子のふれあいひろばで実践し学んだことを生かして、今後の実習・就職につなげたい。

②子育て支援 “母と子のふれあいひろば”

7月から毎月参加させてもらい、最初は子どもたちも見知らぬ人たちがたくさんいるこの環境になれていないだろうし、私自身どようにかかわっていかうかと不安はあった。しかし、子どもを迎えるところの挨拶からはじめ、お母さんと子どもに安心できる環境を作ろうと心がけてきた。そんな中で、子どもたちと触れ合い元気をもらいながら楽しむことができた。そして何よりも子どもの笑顔をたくさん見ることができて嬉しかった。初めて出会った頃は、お母さんと離れるのが嫌で、ずっと一緒にいたり泣いたり話しかけても恥ずかしいためかお母さんの後ろに隠れてしまったり、お母さんに抱かれている状態だった子どもも、少しずつお母さんから離れて遊んだり、一人で自由に歩き回っていたり、この約半年間で0歳児から3歳児までの子どもの成長を自分の目でしっかりと見ることもできたよう

に感じた。子どもはあっという間に大きく成長していくのだと驚きと共に改めて気づくことができた。また、発想力にも驚いた。例えば、ボールの入った箱の中にスッポリと入ったり、ボールの箱を傾けて出てくるボールを箱の中に戻そうと必死にかき集めたり、その場にあるおもちゃでふとした動きからさまざまな遊びへと広がっていた。一度やりだすと休むことなく遊んでいて、子どもの元気良さに私も一緒に楽しんでいたのを覚えている。「できた」とジャンプしながら周りに知らせ、とても嬉しそうだった子どもの笑顔は忘れることはないだろう。

この母と子のふれあいひろばでたくさんのことを学ぶことができた。子どもに対する親の様子やまだ遊びたくてお片づけするのが嫌で泣いた子どもなどに対する先生の対応の仕方など見て勉強になったし、考えることもできた。実際に経験したことを活かして幼稚園教諭という夢に向けて日々頑張りたいと思う。

③子育て支援サークル「母と子のふれあいひろば」を振り返って

私自身はこのサークルのことを途中で知ったので実際に参加したのは2回ほどでした。ほんの少しでしたが、子育て支援サークルに参加できたこと、本当に幸せでしたし、何より自分の“ため”になりました。それは、子どもたちの前で手遊びや、絵本の読み聞かせ、紙芝居、ペープサート、パネルシアターなど実践的なことができたことです。いくら授業で知識を学んでも実際に行うと焦ってしまったり、緊張したり…実践するのは簡単なことではありません。ここでは、その実践的なことができ、ただ「やる」のではなく、「どのようなことをすれば子どもたちがよるこんでくれるか？」と常に考えて行動に移すことができました。他にも図画工作（プレゼント作り・おもちゃ作り・折り紙）といった将来保育者になる人にとって、とてもやりがいのあることを学ぶことができました。ただ単に「学ぶ・

知る」のではなく、「学びながら“自分も子どもといっしょに楽しむ”」ことがこのサークルではでき、実習や将来のためにいろいろ作りたいという意欲も沸きました。また、子どもと実際に接して子どもの姿や反応を見ることができることはもちろんのこと、お母さん方と実際にお話することができたことは、本当に新鮮でした。来年も是非続行していただきたいと思っています。

④子育て支援「母と子のふれあいひろば」を終えて

私は子育て支援に参加するとき、子どものことや心理を勉強中の私たち学生に何かできることはあるのだろうかと少し不安だった。最初は何をするのか想像できなかつたし、何をしたらよいかもわからなかつたので、ただ子どもたちと遊び、観察していた。

子育て支援第1回目は、時間が近づくとつれて母親と子どもが集まり部屋に入ってくると少し緊張もしていた。私は部屋のおもちゃの近くで待っていた。きっと子どもたちは人見知りもするだろうし、中には泣く子もいて今日は何もできないかも知れないと思っていたが、個人差はあるものの、人なつっこくすぐに私たち学生のところに来て「一緒に遊ぼう」という感じで近寄ってくる子どもが意外と多かつたので安心した。そこからは積極的に子どもたちにかかわって行くことができた。

回を重ねるごとに子どもたちの気持ちの成長も見られ体も大きくなっていくのが感じられた。ハイハイしかできなかつた0歳児の子どももつかまり立ちができたり、つかまり立ちしかできなかつた子どもがしっかり歩けるようになったり、子どもたちが毎回成長していく姿が見られたので楽しんで参加できた。

また、お母さんとも会話する機会があり「最近なんでもゴミ箱にいれるのよ」とか「靴下を履かせてもすぐに脱いでしまうの」とか、教科書にも

載っていない、私たち学生には分からない子どもたちの家庭での行動も知ることができたり、子どもたちの好きなことや、夢中になることも知ることができた。

今回、子育て支援に参加したことによって、子どもたちと触れ合い、母親とも触れ合い学ぶことがたくさんあった。子どもの遊びをとってみても、私たちが想像していない遊びを展開したり、普通の使い方とは違う使い方をしたりと感心することも多くあった。また、私たちがあまり興味を示さない部屋の障子に興味があったり、襖の奥が気になったり、服のチャックが気になったりすることも私にとっては新鮮な驚きだった。

これは参加学生の一部の感想である。子育て支援活動として学生が親子と触れ合う実践の場や、相談を含む体験の場は極めて少ない。今回、学内の子育て支援事業「母と子のふれあいひろば」に参加した学生は、子育て支援活動に意欲を持ち、興味がある学生であり、参加後の意見や感想には、地域の子育て支援の意義や目的に関心が深まり、興味をもったことが示されている。母親の悩みや質問に対する教員のアドバイスを側で聞くことで、学びの場を得たとする感想も聞かれた。

全員の感想を載せられないが、それぞれが、子どもたちの成長していく姿を実際に感じ、親子の姿を間近で見ることで多くのことを学び、保育の大変さと楽しさを改めて感じることができたようである。

少子化や核家族が進んでいる社会状況の中で、普段子どもを抱っこしたことのない学生や、子どもとかかわった経験の少ない学生は、抱っこしたり一緒に遊んだりできたことを貴重な経験と捉え

ている。

保育者養成をしている私たちがやらなければならないことは、学生に乳幼児と親の姿に触れる体験学習の機会をいかに豊かに用意できるかということである。

4. おわりに

今回応募数の2倍の応募があった。その中から15組限定にしたものの、毎回全員が参加できたわけではなかった。中には父親の転勤や母親の出産によって途中からは参加できなくなった親子もいる。また、1回か2回参加しただけで子どもが来るのを嫌がる、集団に入れないとの理由で来なくなった親子もあり残念に思うが、母親自身が参加することに躊躇してしまい断念してしまう。頑張ってきて欲しいと励ましの電話をかけることもあり、このような子育て支援の場では必ず起こりうることであるが、その親子がその後どのように過ごしているか気がかりではある。このような子育て支援をする上で大切なことは何か、親子が求めている支援とは何か、親子が共に育つような子育て支援とはどのようなことか考えていく必要がある。

なお議論の末、参加年齢を0歳児から3歳児としたことについては、0歳児を持つ母親の育児不安が多いことによるものであるが、一集団の中で年齢層が広がると、小さい子どもに焦点を合わせるのか、大きい子どもに焦点を合わせるのか、内容によっては参加者全員が満足できるような対応がなかなか難しい場合もある。個別対応を交えながら、それぞれが楽しめ満足できる場を作っていくことが望ましいのであろう。

今回、本学においては初めての子育て支援事業であり、大学の一室を間借りしての事業ゆえに毎回の部屋の設置など不便さを感じながらの実施で

あった。なお、学生の服装や髪などの身だしなみに気になるところもあり、来年はユニホームとしてポロシャツを着用、髪を束ねること、スカート禁止などを決めた。

学生が自主的に参加してくれたものの、積極的に参加させるための事前の準備、実践指導の時間については、学生や教員の授業時間との関係の難しさがあった。今後もこの子育て支援事業を継続するならば、授業科目と子育て支援事業が連携できる体制づくりをし、それなりの時間の確保が必要となってくる。今後の活動の展開方法としては教員主導型の活動から学生主導型の活動に持っていくために、学生の意識の向上と積極的な参加を促し、その場で学び得たことを保育の現場で活かせるような活動の方法を考えていくことが大きな課題である。

地域の子育て支援は、先にも述べたように多くの機関で取り組まれているが、養成校での子育て支援の取り組みの意義は、地域への資源の還元であり、学生が親のかかわり方や支援のあり方を学習する環境として、より多くの学びができ実践力ある保育者養成を図ることであると考える。

子育て支援事業実施協力者

教 員	教 授	澤 田 瑞 也
	准教授	竹 内 伸 宜
	准教授	林 敬 子
	准教授	作 美代子
事務職員		内 海 嘉 子